

九十九里浜と文化人(1)
中西月華と向上会1

戸村直文



九十九里浜には多くの文化人が訪れていま
す。当町には竹久夢二、徳富蘆花、島崎藤村、
高村光太郎など、多士済々。また、当地の文
化人として、中西月華がおります。
月華は、中西月華がおります。
神田の下宿で一緒に過ごしたのが、上野美術学
校鑄金科の川崎安(後の原安民)と香取秀真
である。記されています。月華は、川崎安から
夏休みに、彼の故郷、大磯に誘われ、初めて「海
水浴場」なるものを見る。「無料休憩所」とな
っており、湯茶を無料で接待しているのに驚い
た。
大磯は、箱根に通じる東海道の宿場町で、
箱根の温泉に行くことを「湯治に行く」と云っ
ていた。「湯治」と云えば、箱根の温泉に行く
ことである。「湯治」の頭に「潮」を付けて「潮
湯治」という発想を描いた人がいたと、川崎か
ら聞いたことがあります。その人の名は、吉田
健三(吉田茂首相の義父)。吉田茂は養子に入っ
た。
月華は、九十九里浜六十キロに及ぶ白砂青
松の海岸は、大磯より遙かに勝っていると思
う。九十九里浜にも、こ
うした施設を作ろう
と決意したとありま
す。
月華は、地元知識
人と語り、向上会
を組織し、協賛者
を募り、片貝海岸に「無
料休憩所」を開設し
た。
鶴巻教授の「片貝
の文化・文芸・町起
こし運動」を見ると、
彼の交流人物はかな
り多彩で、町起こし
の熱意に感心する。
『年譜』を拾ってみ
ると、明治36年「暁
声会」雑誌「暁声」
の刊行。顧問に原安
民・香取秀真・伊藤
左千夫とあり、明治
38年に「向上会」

九月十六日の「史跡散策II」の記録
秋の北総史跡を訪ねて

加藤 隆雄



地(の)端にある長谷(ながべ)の「大原幽学史跡
公園」に到着。幽学が天保年間(1830)4
4)に門人の協力を経て耕地整理された字八石
(はちこく)の整然と区割りされた貴重な水田
を見渡しながら、急な七十段余の石段を登ると、
天保十三年(1842)、名主遠藤伊兵衛が幽学
に住居兼教伝所として提供された建物前に着き
ました。国指定史跡の建物で、質素でも丈夫な
造りで、土台の木部も朽ちて無く健全な状態に
感じました。次いで四十段の石段を登り、記
念館に入館。幽学の著作や日記、書簡、書画、
着物、刀など、ゆかりの遺品類や、その生涯の
を結成。事務所を西の下戸村岩吉郎宅?とあり、
メンバ―も、教師・医師・町政担当者・地方知
識人などを集め、活動として同人誌の発行、定
期的な会合、名士を招聘しての講演会、海水浴場
の整備など、活発な運動を展開した。寄付など、会
会の維持費などについては、無料休憩所のある
同士の工面していたようである。無料休憩所
運営費については、後に町の補助金が出たとあ
る。
月華は、東金の文化人たちとも盛んに交流し
ていた。明治29年に東金八鶴湖で開かれた、
徳富蘆花や山路愛山らの講演会に、向上会のメ
ンバ―と参加し、逗留を促された。彼らと親交を結
び、後に九十九里見留の因縁となった。文章を
付けた「避暑案内」を作成し、東京方面で宣伝
した。(以下次号)

業績を拝観しました。改めて、二宮尊徳と並
ぶ幕末の農村指導者であり、千葉県を代表す
る偉人の一人であることを再認識しました。
長谷を後に、匝瑳市「妙雲山飯高寺」(飯高
檀林跡)を訪ねました。階段よりもきつづく思
われる急な坂を登ると、天明二年(1782)
建立の総門があり、一礼して境内に入ると、歴
史の重みを感じさせる杉林が続く。石畳の正面
に慶安四年(1651)に再建され、平成十四
年の大修理を終えた県内一番大きな重要文
化財である講堂が現れてきました。関東八檀林
三化主(檀林長)、心性院日遠は揺るぎない地
位を築いた僧で、また、徳川家康の側室・お万
の方(養珠院)が、日遠を深く帰依し、講堂
を寄進したそうです。昼食の約束時間に制約さ
れ、素通りのような拝観でしたが、いにしえの
学僧たちの姿を偲ぶ気持ちを幾ばくか持ち得
た感じがしました。
昼食は、匝瑳海めし街道の「そば処割烹浜
菊」で、そばと海鮮丼を頂き、満足しました。
昼食後は、多古町の「正東山日本寺」(にち
ほんじ)の中村檀林跡)を訪ねました。鎌倉時
代後期の元応元年(1319)に中村法華経寺
十五世日祐上人が檀林を開設。慶長四年(1599)に
6の学坊があり、270年間に延べ10万人が
全国各地へ果立して行ったとのこと。特に二
階建ての講堂が珍しい。
最後は、成田市の「日本の歴史公園100選」
の「三里塚記念公園」を訪ねました。この記念
公園内には、およそ100年にも及ぶ我が国の
畜産振興の輝かしい実績と幾多の記録を残した
貴賓館、防空壕、水野葉舟や高村光太郎の文
学碑などがあり、係員からは各施設について
内容のあるご説明を頂きました。
今回は、訪ねた箇所が多く、時間的制約が
ある中、充実した北総の史跡巡りでした。役員
の方々にお礼申し上げます。
事務局/村松英一記
天気も良好にて、快適
な研修が出来た。最後
の芝山の道の駅にて、買い物タイム。会員は俄然元
気になる。買い物も済み、バスの中では齊藤氏の弁
も滑らかに。九十九里に近くなり、会長の挨拶、齊
藤氏の締めにて閉会。会員の笑顔と感謝を感じ、充
実した一日。S氏が転倒したことがチヨット気にな
り、また、会計面で予算オーバー。でも、気にしな
い、気にしない!

戦記物語(3) 満蒙開拓青少年義勇団として

長岡 眞雄

昭和二十年(1945)十二月中旬頃、突然、関東軍司令官二人が乗馬姿で軍使として、白旗を振りながら終戦を知らせにきた。八月十五日に終戦になったことを知らずに我が部隊は疲れ果て、体にムチを打って、ソ連軍との激戦を続けていた矢先でした。本場に油断の出来ぬ命がけの緊張の連続の戦いであつた。私達戦友同志は、アジアの人々の為に行つた戦争での勝利を疑わなかつただけに、とても残念な終戦を告げられ、将校以下全員、ソ連兵の指示により、十二月二十五日、武装解除をし、あらゆる武器は一切没収され、数日後、貨物列車に乗せられ、シベリア鉄道本線に、ここからウラジオストクへ。...

茂原本納の橋樹神社と『古事記』

鈴木 陽子



九十九里郷土研究会では、春の史跡散策として、今年は大網白里市と茂原市の神社・仏閣を訪ねました。『古事記』に登場する弟橘比売命を主祭神とする橋樹神社へも詣でました。茂原市の本納に鎮座するお社です。天候にも恵まれ、青葉の木々の間に鎮座する本殿の前に立つた時に、比売様の御霊も安らかであらう。

命令が出ましたが、全員一回には帰れず、名前を呼ばれた順からで、私は二週間遅れて帰国命令が出ました。呼ばれたときの心境は、「あー、故郷に帰れるんだ!」と嬉しくって、今まで生きてこれて、涙が出ました。乗船の命令が出て、京都の舞鶴港へ向かつての出発の汽笛が鳴り、「いよいよ四年ぶりで実家の山形に帰れるんだ!」同僚の皆さんも、元気で生きて帰れることを待ち望んでいたことでした。...

と思われました。茲に倭建命と弟橘比売命の美しくも悲しい伝説を取り上げ、二柱の神に向けたらと思う。景行物語の年代は確定出来ませんが、第十二代命は、天皇の皇子である小碓命、又の名を倭建反乱を起し、大和朝廷に服属しない人等を平定して、天皇へ帰つて天皇に復命をするように、次々と平定した命を下す。皇太子は西方の熊曾建征伐の帰途、出雲国に入り、出雲建も打ち殺して大和に帰って天皇に御報告された。ところが天皇は一間を置かず追討をかけたかのように東国十二国を荒ぶる神、まつらはぬ人等を平定せよ」と東征の命を下す。勅命を受けた時に、倭建命の悲痛な言葉を『古事記』に記されている。天皇既に吾に死ねと思ほすゆえにか」と。東征の途中、走水(浦賀水道)から上総に渡ろうとした時に、海神が荒れ狂い、皇子の船をぐるぐる回して渡ることが出来なかつた。この東征に従つた後である弟橘比売命は、海神の怒りを鎮めるために、人身御供となつて自ら命を海に投ずる決意をする。一あれ、御子に易(かは)りて海の中に入らむ。御子は遣はさし政(まつりごと)を遂げて、覆(かへりごと)奏(まを)したまふべし」と皇子に申しおいて、菅豊八重、皮豊八重、絹豊八重を波の上に乗せて、その上にお降りになつた。すると、荒波は自然と穏やかになつて、船を前へ進めて上総へ渡り来る事が出た。弟橘比売命は海に敷き詰めた神婚の座に降りようとする時に、次の歌を詠んだと伝えられている。さねさし相武の小野に 燃ゆる火の火中(ほなか)に立ちて 問ひし君はもこの歌は、走水に至るにばらく前には、二人は相模の国造の謀言にあつて、草に火を放たれ、野火に囲まれ、逃げ惑い、命辛々脱出したことがあつた。この時に燃えさかる炎の中で、何度も安否を問うと下さつた皇子に感謝の気持ちと恋情を贈つた絶唱だと思ふ。歌のすぐ後に、一故、七日の後、その後の御櫛(みくし)、海辺に依りき。乃ちその櫛を取りて、御陵(みはか)を作りて治め置きき」とあり、『古事記』は伝えてある。橋樹神社の本殿の背後には、小高い古墳がある。弟橘比売命の御陵と伝えられておりますが、まことに閑静な良い地に眠つておられます。(参考文献)西宮一民校注『古事記』新潮社

きつねの提灯行列

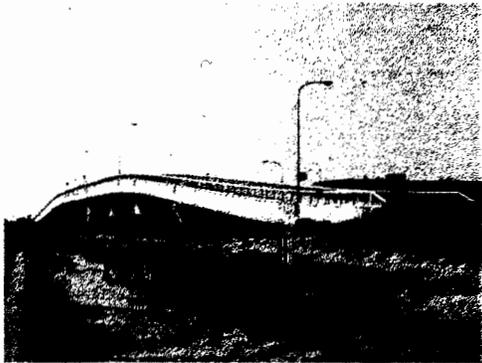
核井 宏樹

私が幼少の頃（昭和十四〜十五年）の思い出話です。夏の夕暮れに、今住んでいる家から二百mの東へ、県道銚子飯岡線より一宮までの、現在よりずっと細い、いわゆる準県道がありました。真亀の浄泰寺のこんもりと繁った境内が、私の先祖代々を守り続けてくれるお寺です。夜になり、辺りが暗くなつた時、私の祖母が「早く来て見な！きつねの提灯行列が始まるよ」と、私たち孫三人に声も高らかに知らせに來ました。

思い起こせば、百m程の長蛇の行列を作り、「チラ」「チラ」と灯りが付き、上がったたり、下つたり、または消えたりと、それは不思議な夜の光景でした。やはり「きつね達が寺の境内に住み着いていたんだな！」と、八十歳を過ぎた私の脳裏に焼き付いて居ります。また、話は他へ移りますが、私の叔父になる、元農協組合長を務めた桜井和さんが酢の醸造業をしていたので、白子方面の各雑貨店に酢を配達に行った時の話です。配達途中に、「今日のおかずは」と思い、途中で肉を買い求め、牛車の後ろに積んで、夜道を帰って来たのですが、途中で、何か不審の思い、肉の買物を見たら、袋がそっくり無くなつていたそうです。それで、南の白子から九十九里真亀までの帰

写真で見る <3> 九十九里町の史跡

九十九里有料道路の智恵子橋



九十九里有料道路の真亀川に架かる九十九里町と大網白里市を結ぶ橋の中で、一番海側を走っている橋を「智恵子橋」と命名されている。平成十年三月竣工。高村光太郎の『智恵子抄』に起因しているようで、何と粋な名を付けたものと感じるがその割には知らないようだ。



映画『智恵子抄』の撮影に來た原節子さん

谷川 良枝

り道を、いくら進んでも白子方面へ牛車が進んで行つたそうです。「きつねに化かされた」とは、このことでしょうか？
現在では、糸を張つたような素晴らしい道路となり、森らしい森もなく、車の往來が激しくきつねの出る幕ではないようです。現代の世の中には考えられない、昔の不思議な話です。

確か小学校五・六年の頃だつたと思います。人伝いに「今日、片貝海岸に女優の原節子さんが來て、ロケーションがあるらしいよ」と聞きました。心わくわくさせながら待つてみると、一台の車が止まり、降りてきた原節子さんは、背の高い、目のとつてもきれいな人で、笑顔でした。「こんなにきれいな人がいるんだ...」。しみじみ見とれました。原さんは、ドーラン化粧をして、着物姿で、浜辺まで歩いて行きました。

私たちは、そろそろ後に付いて行き、撮影を見ていました。男性が畳一枚位の反射板のようなものを持ち上げ、いろいろ角度を変えて相談してました。スタッフの人でしょうか、持つて來た鳥かごから小鳥を出しました。小鳥には足に細い糸が付いていたのを覚えています。その鳥は、千鳥だつたのでしようね。原さんは、その千鳥を手に乗せたり、磯辺を歩く姿を、笑顔で演じていたような気がします。撮影が終わると、また歩いて西の下の大田屋酒屋さんまで帰って來て、二階で休憩してました。

私たちは、なぜか二階への階段まで上がった、その姿を見て居りました。太田屋さんの御主人の御好意だつたのかも知れませんが、まぼろしの女優さん、原節子さん...先年亡くなられたとお聞きして、また、あの日の光景が思い出されました。

原節子は大正9年に横浜保土ヶ谷で生まれ、昭和38年に女優業を引退し、鎌倉で隠遁生活を送り、平成27年9月5日に95歳で亡くなった。なお、『智恵子抄』は昭和32年、37歳の時の作品である。なお、共演した青山京子は81歳で、俳優歌手小林旭の奥さん。

事務局日誌

記/村松英一

1. 募金のお礼
伊能忠敬翁没250年、「香取市に於いて、伊能忠敬翁銅像を建立し、日本の誇りと再認識して頂くとともに、香取市の新たな象徴として地域の活性化に寄与する」ことを目的とした企画に、本会はいち早く賛同し、募金を募りました。

6月26日に目標額に達し、香取市の事務局に送付しました。先日、先方から「お礼状」が届きましたことを報告します。ご協力ありがとうございました。きつと立派な伊能忠敬翁像の雄姿がJR佐原駅前で皆様をお迎え下さると思えます。

2. 「会誌 伊和志」が間もなく完成!

本年度の最大の事業である「会誌 伊和志」第2号発行は、お陰様で会員86%以上の方の投稿を頂き、12月中旬に発行される運びになっています。ご協力ありがとうございました。会員の方には2冊配布しますが、友人・知人などへの紹介・販売にご協力をお願いします。

あとがき

編集係(?)にとつては、この『通信』と『会誌 伊和志』第2号との同時編集。時々この編集がどちらのものか、戸惑うことも。また、間違つて『伊和志』のものを『通信』で扱つたりしてやり直したり...。仲間は言う。「よくぞ同時にやるねえ!」とか、「一つくらい他に自慢できるものがあるよ...」と。12月発行予定の『伊和志』の方にもお目通しを。(本保)